

島の生態系を守り、未来を拓く

佐渡

知られざる杉の原生林

鈴木さわこ

二〇〇八年七月に行われた洞爺湖サミット。主要八カ国が揃う会議は連日マスコミに取り上げられ、各国首脳がテーブルを囲み談笑する晩餐会や首脳会談の様子は記憶に新しい。そして会場となったホテルの最上階に設置された、幅四メートル、高さ一・五メートルの特大写真は当時たいへんな話題となった。カメラマン・天野尚氏撮影による幻想的な霧の中にどっしりとたたずむ杉の巨木。「この杉はいつたいたいどこにある?」「この場所に行ってみたい!」。これこそ、その存在を日本に限らず世界中に知らしめることとなる、佐渡島の杉原生林の華々しいデビューであった。



大王杉とそれを取り囲むように育つ天然の若杉たち。

佐渡の杉原生林で 巨木に逢う

五月の初旬、噂の巨木に会いに出かけた。新潟大学の崎尾均教授の案内で、佐渡の巨木の待つ山に入る。

「数日前の大雨で崩れた箇所がありませんでした、危なかったらすぐ引き返しますから」という言葉に気が引き締まる。今年は雪も多く、ゴールデンウィークが過ぎたというのに雪もかなり残っているという。

あいにくの小雨のなか、車で一時間以上林道を走り続けただるうか、ミルク色の濃霧が立ち込めてきた。標高約六〇メートルを超えてかなり肌寒くなってきたが、カタクリやシラネアオイの花が林道沿いを彩り、新緑も心地よい。崎尾教授によると、ここの植物の垂直分布（標高による生態系の変化）は通常と異なるという。例えば、標高七〇〇メートル近いこの場所で、こうしてカタクリの花が咲く一方で、標高一

五〇〇メートル以上の亜高山帯に分布するハクサンシャクナゲが咲く。

「海からの湿った風が吹き上げられるので、ここ一帯は一年の大半が霧に覆われた湿潤な空気で満たされています。雨が降っていないくても木の枝から水滴が落ちてくるほどですよ」

離島だからこその特殊な気候が多様な植生を生み出しているのだろう。一つひとつ説明を受けながらしばらくいくと、林道から脇道が現れた。「王様の小径」という標識がある。ここからは車を降りて、人ひとり分の幅しかないケモノ道のような道を行くことになる。険しい道りではあるが、ホオノキ、ナナカマド、ヤマモミジなど、豊かな緑を楽しみつつ進むうちに、大きな木々が見えてきた。太い幹から枝葉を広げる「大王杉」、この演習林内で一番大きな天然杉だという。幹回りは六メートルを超えるところも言われ、ただだ圧巻。さらに枝の形状が非常に面白い。まるで下から何かを持ち上げる

かのようなしなりを見せてから上に向かっている。冬の間、天然杉の残る稜線上は三メートルから六メートルもの水分を多く含む重たい雪が積もり、枝葉に積もる雪の重さも何百キ口となるため、このような形状になるといふ。厳しい佐渡島の冬を何百年もの間たくましく生きてきた姿がここにあった。

その大きさもさることながら、大王杉を中心として小杉がとり囲むように立つ姿も珍しい。説明によると、これこそ天然杉林のあるべき姿だそうだが、植林などをせずとも、伏条更新（積雪などによって接地した枝から発根、新しい株をつくる）によって若い杉が周囲に生えていくのだという。

単なる巨木の素晴らしさではなく、原生林と呼ばれ自然が豊かな場所だと言われる理由が分かる気がする。

その後も次から次へと現れる杉の巨木たち。「仁王杉」「千手杉」「金剛杉」……名前のついているものも、ついていないものも、どの杉をとっても形が



新潟大学の演習林入り口。ゲートは鍵がかかっており、許可のない一般の出入りは禁止されている。



ルート沿いには300～400年前のものといわれる石仏が点在し、歴史的にも注目されている。

異なり、太く、力強く、独創的な雰囲気をつくっている。

「樹齢何年かということにこだわらず、風速四、五〇メートルにもなる激しい風と重たい雪がつくり上げる造形的美

しさを感じてほしい」という崎尾教授の言葉に深くうなずくばかりである。

そしてこれだけの素晴らしい原生林が、数年前までは佐渡に住む人でさえ、ほとんど知らなかったというのも不思議

議なことである。

新潟大学の長期計画が巨木を今に引き継ぐ

原生林のある場所は、佐渡島の北東部に連なる、大佐渡山脈の主稜線上、新潟大学の演習林内に位置する。古くは江戸幕府の直轄地、明治以降も皇室の御料地として人の関与が厳しく制限されてきたという。大正に入り新潟県の県有林となった後、昭和三〇年、新潟大学農学部へ演習林の無償譲渡が決議される。

「林学科に演習林が必要ということで譲り受けることになったのですが、実際は植林もできないような辺境地でした」と崎尾教授が言うように、約五〇〇ヘクタールほどの演習林の八〇パーセントが斜面で構成され、しかも傾斜の平均が二五度とかなりの急斜面のため、斜面崩壊が頻繁に発生し林道も整備されてない当時、演習林の調査は困難を極めたという。

島の生態系を守り、未来を拓く

佐渡 知られざる杉の原生林

しかし、調査をはじめた新潟大学は、小さいながらも高い自然度を備えた森林生態系を持ち、約五〇〇種の植物や多数の動物・菌類が生息するビオトープとしての機能を保持した非常に個性的な演習林だと確信。その重要性を指摘し、「森林資源の保続と資本維持」「生産性の向上」を経営方針の大綱として掲げ、管理していくこととする。当時は日本各地に残っていただろう同じような原生林たちは、さまざま近代化の流れのなかで、徐々に消えていってしまったいま、こうして守られてきた杉の原生林およびその周辺の環境の重要性が、あらためて脚光を浴びることになったのだ。

知られるとどうなる？デメリット

解決策の模索のはじまり

これまでは大学の演習林だったとはいえ、住民の入山が厳格に禁止されて

いたわけではない。夏になると放牧される牛が演習林内でのんびり草をはみ、主要港である両津へ海産物を運ぶ生活道路として峠越えの道は昭和まで実際に使われていた。

「島の暮らしのなかの山の役割というものも大切ですから、それは共存だと思っています」

確かにいままではそれでよかった。しかし、原生林の写真展、写真集の発行、そしてサミットでの特大パネル展示を経てその存在を多くの人に知られるようになったことで、いろいろな問題が噴出してきた。「演習林に入りたい」「原生林を見てみたい」という声が新潟大学に殺到。通常の演

ミ有名に集をう遊さ
ッ剛に内を遊さ
サ金林に根よの置
湖一躍った林い木置
洞爺湖に杉(演習する林)。ない木置
トでなく隣接する有林)。ない木置
に杉(演習する有林)。ない木置
隣接する有林)。ない木置
ある。周囲に設置
な。周囲に設置
した。

習林の管理・研究の合間にスタッフが案内をしていたが、少ないメンバーですべてを対応するには限界がきていた。さらに、許可無く入山し、希少な植物類の盗掘や道以外の場所に入り込み、大切な林床を荒らし、生態系を乱すような行為が見られるようになったのだ。実際に案内してもらっている間にも、





谷沿いに吹き上げる強風のため、樹齢100年以上の杉であっても地べたを這うように育つ。

る。これらの二の舞になってはいけない。そこで平成一九年度からは新潟大学指導のもと、環境教育効果を意図する佐渡エコツーリズム・ガイド養成講

座が開始。ガイド養成は一年に一四〇時間を越えるフィールド実習プログラムをこなすことが義務付けられ、所属のガイド協会を一元化することで、ガイドの質の低下を招か

ないように配慮をした。

こうして体制は整いつつあり、試験的に原生林トレッキングの募集もはじまる。コース

は佐渡島東海岸側の北松ヶ崎から徒歩で登る「内海府コース」。約九時間半の行程は、大佐渡山脈の山毛櫨ヶ平山近辺の尾根から外海府（西海岸側）の海原を望んだのち、「大王杉」

「タコ杉」などを見学する。金額は、片道小一時間かかるタクシーの往復料金とガイド代の保険代、環境保全協力

金など込みで一人あたり一万三八〇円（人数により割安になる。詳細は佐渡観光協会へ要問い合わせ）、二名以上での開催だ。

平成二一年度、大々的な告知や宣伝を行わなかったものの、口コミなどもあり参加者は一六〇人。五〇代以降の島外の年配者がほとんどで、その八割は屋久島の原生林トレッキングの経験者という結果だった。

「コース内容や金額に関しての不満はなく、とても感激したという声も届いています。かなり健脚向きのコースであり、お手軽な観光スポットでもありませんが、そういう価値の分かる人に来ていただけで、満足していただけたことに一安心しています」と佐渡地域振興課の中村長生さん。

住民に親しまれる 原生林になるために

だが、ひとまずの成功に一息つくどころか、実際にはじめてみると地元か



演習林内を案内してくれた崎尾教授。

らさまざまな不満が噴出してくることとなる。

- ・ガイド養成講座の公募が伝わりにくく、原生林近隣在住ガイドが少なかつたことからくる、地元の疎外感。
- ・トレッキングに参加した人たちは日帰りが多かったため、地元の集落の活性化への疑問の声。
- ・島内の人にとっては値段が高すぎて参加できない。ガイドなしで勝手に登

る人が横行し、山野草を盗まれる事件も多発。

「いまは佐渡島内をしつかりとまとめる時期だと考えています。トレッキングのお客さんのニーズや問題ももちろん大切ですが、最初に解決すべきは地元と意思を共有できるトレッキングの方法を考え

ていくこと。そのために私たちが動かなければならないと思います」
佐渡市は平成二〇年二月、「佐渡の原生林の将来像を考える会」を開き、新潟大学、地元住民、佐渡市が揃って話し合う機会を設けた。

「住民なのに、優先的に原生林が見られないなんて」観光資源の前に後世に

残すことが大事なはず」佐渡の良さを出せるガイドの育成を」。厳しくも熱い話し合いが月一回のペースで続けられた。そしてそれらの意見をまとめ、住民向けのツアーの開催、近隣集落向けのサブガイド講座を設けるなど、新しい対応がとられていくこととなる。これらは単なる問題解決にとどまらず、いつしかともに原生林の将来、佐渡島の将来を考えようという住民の意識を深める場として大きな役割を果たすようになっていったのだ。

「外海府ルート」は 地元のさらなる協力を得て

これらの話し合いの一つの形として、今夏より新しいトレッキングコースが生まれるという話を聞いた。新しいルートは、内海府とは反対の外海府沿いにある閑集落を通って山に入る、通称「外海府ルート」という。目玉は洞爺

島の生態系を守り、未来を拓く

佐渡
知られざる杉の原生林

島の生態系を守り、未来を拓く

佐渡 知られざる杉の原生林

中心となって独自の環境調査を依頼したり、活用ワーキンググループを形成して原生林への理解をできるかぎり集落全体で深めることに尽力した。

「確かに、盗掘の問題や、いままで静かだった集落にどのくらいの観光客が来るのかなど、心配な部分もあります。しかし、外海府ルートがコースにタクシー代を含まない方式（登山口に車が止められるため）をとったことで、島内の人も参加しやすい価格にすることができ、原生林をもっと身近に感じてもらえることになるでしょう。さらに島外の人には、ぜひ一泊以上してもらって原生林以外の佐渡の良さを味わってもらえるよう、集落全体でサポートしていくつもりです」

そして六月、待望のモニターツアーも行われた。参加者の募集を佐渡市市報や島内の新聞折込みで行ったところ、なんと初日だけで募集人数三〇名を優

に超える七六名の応募があり、最終的に一〇〇名以上の応募となったため、急遽モニターの本数を増やして対応することになったという。こうした島内での関心の高さも、二年間かけて地元

が納得できる原生林の保全と集落の活性化を模索しつづけた結果ではないだろうか。

原生林を守り、 佐渡島の将来を守る

好感触だった外海府ルートとともに、



島という隔離された場所で貴重な植生と豊かな自然が残る。

今度は小中学生が環境教育のために入山できる初級者向けのルートもできた。こちらは「千手杉ルート」。杉に取り囲まれるように広がる水辺には、クロサンショウウオやモリアオガエルなど希少生物が生息している。通常尾根沿いにこれほどの水場ができることは珍しく、比較的平らな尾根を持つ佐渡島の山々ならではの風景だという。

いままでほとんど知られることなかった佐渡島の原生林。さらに知名度が上ると考えられるなかで、後世を担う子どもたちに原生林を守る大切さを感じてもらうために重要なルートとなることである。将来の佐渡の原生林がどうなっていくのか、島内の人々の原生林を守るといふ気持ち

がどれだけ高まっていくのか。主導の新潟大学とのパイプ役

さどがしま 佐渡島 data

新潟市の西約45kmの日本海に位置する、わが国最大の離島。面積854.88km²、周囲262.7km、人口64,081人(平成22年9月現在)。北の大佐渡山地と南の小佐渡山地に挟まれた中央部には広大な国仲平野が広がり、稲作地域でもある。農業は米作を中心におけさ柿、シイタケ、葉タバコなどを生産。トキの自然放鳥とあわせ、トキとの共生をテーマに有機農業に力を入れている。水産業では年間2万トンの漁獲量を誇り、カキやワカメなどの養殖も盛ん。沖を流れる対馬暖流の影響で、冬は本土より暖かく、夏は逆に涼しい。平成16年3月に合併、1島で佐渡市が誕生した。



鈴木さわこ (すずき さわこ)

1969年生まれ。早稲田大学第一文学部東洋哲学科卒業。ハンドクラフト、インテリアなどに精通し、女性誌を中心に編集執筆を行う。「クラフトCafe」「ホームスウィートクラフト」(ともに日本ヴォーグ社)など多数。佐渡島出身の父からの影響もあってか、離島への興味を持つようになり、年に数回は島めぐりを楽しんでいる。

として、佐渡市の役割は重大である。そしてもう一つ。「こうして天然杉が注目をされるようにはなりませんが、私たちとしては杉に限ることなく佐渡島の森林の生態系全体が大切であり、守るべきものなのです」という新潟大学の崎尾教授の言葉がいまも耳に残る。守るべきものは、杉の巨木だけではない。きっかけは巨木であっても、それから原生林全体へ、そして佐渡島全体の問題へと繋がっていくこと。次のステップはここからはじまるのだと感じる。

【参考文献】
新潟大学農学部附属フィールド科学教育研究センター「森林生態部佐渡ステーション」第七次経営計画書

じる。はじまりはたった一つの問題でも「佐渡の将来を考えてどうしていくべきか」と皆で考えることで、考えも活動も関わった人たちの輪も広がっていく。杉の原生林から始まった佐渡の将来を担う活動がどう進んでいくのか、これからも注意深く見守っていきたい。